難民に見える喜びと可能性を届ける

金井氏が社員と贈る、メガネと笑顔のプレゼント

金井昭雄氏が難民にメガネと笑顔を贈り続けて2012年でちょうど30年。金井氏が始めた企業の活動は、今や世界中に認識されている。

金井氏が生まれたのは1942年の樺太（現・サハリン）であった。終戦後、樺太からの引き揚げ者として札幌に移住。金井氏は「当時、引き揚げ者の境遇は難民と同じようなものだった」と語る。1966年に早稲田大学を卒業後、6年間アメリカに留学し、オプトメトリストの資格を取得。このアメリカ滞在中、ボランティア活動に積極的に参加。これが金井氏にボランティア活動や社会貢献の価値の理解を促し、その責任を実感するきっかけとなった。

帰国後、1973年に金井氏の父親が創業者である富士メガネに入社。富士メガネ創業45周年にあたり、記念事業として、「社業で社会奉仕活動ができないか」と考え、メガネを難民に贈ることを提案。引き揚げ者として、金井氏同様の体験をした家族の後押しもあり、1983年、金井氏は多くのインドシナ難民がいるタイに渡り、ボランティア活動に従事した。富士メガネはそれまでも日本のNGOを通して難民にメガネを贈っていたものの、メガネは「人ひとりの視力に合わせなければ使いものにならない。金井氏は現地に赴くことの重要さをアメリカでのボランティア経験から理解していた。

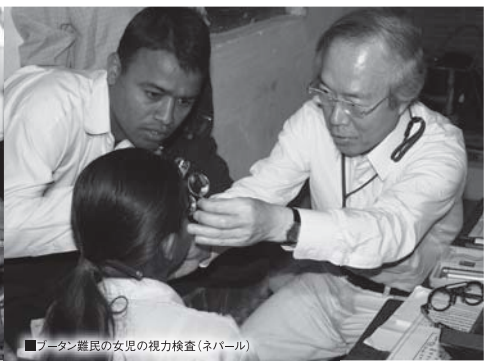
金井氏の活動は、難民キャンプを訪れ、視力検査を行い、その人の視力に合った新品のメガネを贈るというものである。適切なメガネがない場合は帰国し、メガネを作って送り届けている。また、視力検査を現地で活動している団体などに行ってもらい、その結果をもとにメガネを製作し、寄贈もしている。そんな金井氏の活動は、富士メガネ社員の自発的な協力によって支えられている。社員は有給休暇を利用しボランティア活動に参加。その活動に必要な費用は全て会社が負担している。

金井氏の取り組みはUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）にも注目され、1984年以降、UNHCRが金井氏に難民キャンプでの活動の継続を要請。金井氏の功績は高く評価され2006年には日本人で初めて「ナンセン難民賞」を受賞するだけでなく、2009年には緑綬褒章も受章。金井氏と富士メガネ社員のボランティア活動によって、現在までに4ヵ国で、13万3000組以上のメガネが難民に贈られてきた。

難民の中にはメガネがないために勉強に支障をきたす子どもや、仕事につけない大人が沢山いる。そんな彼らに金井氏の活動が、見える喜びと、未来への可能性を贈っている。しかし、金井氏は「ボランティア活動は与えるだけのものではない。それは必ず自分へ還り、心を豊かにする財産となる」と言う。「ボランティア活動を通して、社員も確実に成長しています」と語る金井氏と富士メガネ社員の活動は、日本が世界に誇る、笑顔が笑顔をつくる活動である。

■金井氏の活動が紹介された書籍

■贈られたメガネをかけ、笑顔の難民（タイ）


■ブータン難民の女児の視力検査（ネパール）

金井 昭雄 Akio Kanai（かない あきお）

株式会社富士メガネ 代表取締役会長・社長兼任

Chairman and CEO of Fuji Optical Co., Ltd.

1942年、樺太（現・サハリン）に生まれる。1966年に早稲田大学を卒業後、6年間アメリカに留学し、オプトメトリストの資格を取得。この時、先住民の視力改善ボランティア活動を体験。帰国後、1973年に富士メガネに入社。1983年に初めてタイの難民キャンプに赴き、難民にメガネを贈るボランティア活動を行う。その後、国連難民高等弁務官事務所からの要請もあり、タイ、ネパール、アルメニア、アゼルバイジャンの4ヵ国で毎年社員と共に活動。その活動が認められ、2006年、日本人で初めて「ナンセン難民賞」を受賞した。

推薦者

逢沢 一郎 衆議院議員

ボランティア部門（国際）
Volunteer